



その日の夜。いつもなら授業の復習に集中している時間だったが、昼間の感覚が頭から離れずにいた。
あのときの快感は、確かに私の……股間から感じたものだった。

あれを、もう一度味わってみたい。そんな欲望が湧き上がってくるのを何とか抑える。



そういえば昔、鉄棒をやっていたときにも同じようなことが起こったのを思い出した。

そのときのお母さんはとても怒っていたから、悪いことなんだと思って考えないようにしていた。

昼間のことは忘れて、今は勉強に集中しなければ……。

悶々とした気持ちを忘れるため、自分にそう言い聞かせた。

しかし、考えないようにすればするほど、意識は下半身へと集中していく。少しだけ、触ってみたい……。このままではとても勉強どころではない。ちょっと触って満足した方が、集中できるようになるかも。



そんな誘惑が脳を支配していく。そう、これは勉強のためだ。だから悪いことではない。自分にそう言い聞かせながら、記憶を頼りに、私はズボンの隙間へ手を伸ばした。確かこの辺だったはず……。

「……んっ」

しばらくパンツ越しに股間を弄っていると、昼間と同じ感覚がした。
改めて触ってみると、他の部分と比べて出っ張ってるし、固いように感じる。
まるで豆みたいだ。

「んああっ!？」

慌てて口を抑えた。振り向いて、閉めたはずの鍵を確認してしまう。大丈夫、閉まってる。



「……今の……気持ちいい……」

パンツ越しに出っ張りを爪で擦る。布が間に挟まり、程よい刺激が走った。
気づけば、その行為に没頭してしまっていた。

「はあっ……んんっ……」

抑えた口から変な声が漏れ出す。

それが何となく恥ずかしくなり、抑える手に力を込めた。

「…………っっ?！」

突然、背筋を電気が流れたような気がした。今まで程よく感じていた快感が加速的に高まっていく。

これ以上はダメだ！

恐怖から、慌てて股間から手を離した。快感が少しずつ小さくなっていった。思わずほうっと溜息を吐き出す。

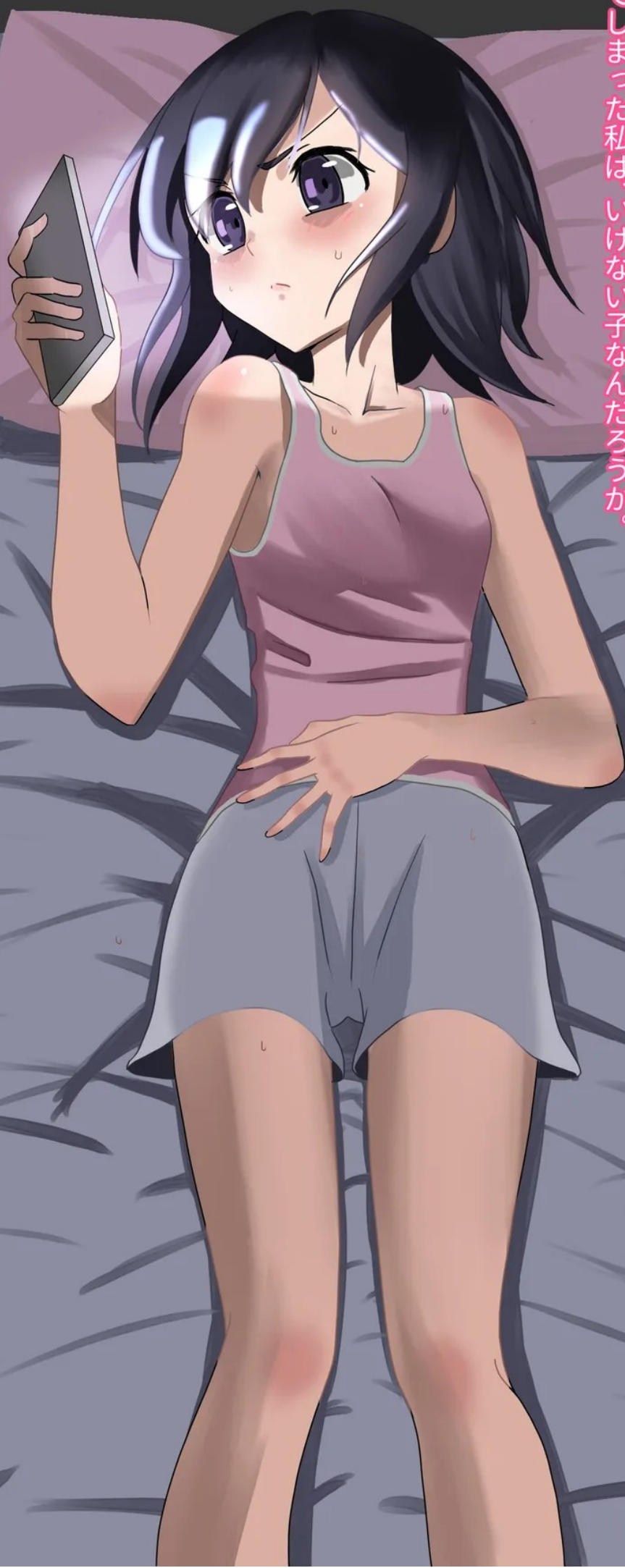


危なかった。あと少し遅れていたら、果たしてどうなってしまっただろう。

きつと、悪いことをしすぎたから天罰が下ったんだ。お母さんが怒っていたのも、これがあるからだっただ。

もう、これっきりにしよう。

数日後。調べてみたところ、あの出っ張りは陰核あるいはクリトリスと呼ぶらしい。他にも、大陰唇やら小陰唇という名前が付いた部分があるようだ。そして、クリトリスを擦って気持ちよくなることは「オナニー」と出てきた。どうやら私は、知らないうちにオナニーという行為をしてしまっていたみたいだ。何となく分かってはいたけど、すごくエッチな行為だったのだと思うと、顔が熱くなってくる。誰かに教えてもらったわけでもなくオナニーをしてしまった私は、いけない子なんだろうか。



でも、「イク」ところまではしなかった。最後に踏み留まることができた。だから私はエッチな子なんかじゃない……はすだ。言い訳をしながら検索結果をスライドしていくと、動画のリンクが出てきた。タイトルにオナニーという単語が入っているところを見るに、女の人がオナニーをしている動画のようだ。

これって、男の人が見るようなエッチなやつなんじゃ……。

見てはいけないと思ういつも好奇心を抑えきれず、リンクを押してしまった。

その動画では、女の人が足を広げて股間を弄っていた。ズボンはもちろん、下着すら着けていない。大事な部分にはモザイクがかかっていたものの、動きで何をしているのかは理解できた。クリトリスを触るだけでなく、下の方の穴に指を入れているように見える。おしっこが出る穴じゃない。確か、膣口という場所だ。男の人のアソコが入る場所。それだけではなく、時々おっぱいを揉みながら乳首を摘んでいた。



この前やったパンツ越しに触るだけのオナニーではない。大人の女性が、本気で気持ちよくなるためのオナニーだった。声を抑えておらず、気持ちよさそうな喘ぎ声がスマホから漏れ出てくる。慌てて音量を下げた。

そんな様子を見せつけられて、私の左手は気づけば下半身へ伸びてしまっていた。

動画の人を真似して、自分の体を弄る。膣に指を入れるのは怖いから、クリトリスを触りつつおっぱいを揉んでみる。

「……あふっ!?!」

しまった、声が漏れてしまった。試しに直接クリトリスを触ってみたが、刺激が強すぎた。しばらくはパンツ越しの方がいいみたいだ。



おっぱいの方は、いまいちよく分からない。何となく快感っぽいものは感じるけど、揉んでいくうちに気持ちよくなっていくのかな。そんなことを思いながら、乳首を摘んでみる。

「あっ……」

クリトリス程ではないけど、快感が走ったのが分かる。

「これ……ちょうどいい……」

程よい快感が心地よくて、しばらくは乳首を摘んだり弾いたりするのに夢中になった。

しばらくすると、女の人の動きが段々激しくなっていく。それと同時に喘ぎ声も大きくなっていく。それに釣られて、私の指も知らないうちに動きが速く、強くなっていった。パンツは愛液で既にぐっしりと濡れてしまっていたが、それに気づけないくらいに夢中だった。

画面の中で、女の人が一際大きな喘ぎ声を上げた。体をビクビクと震わせて、力が抜けたようにぐったりと寝転んだ。ああ、この人は「いった」んだな……。あんなに声を上げて、体をのけ反らせて、すごく気持ちよさそう。



私も、この人みたいになれたら。そう思うと、今までにないくらい興奮して、指に力がより入ってしまう。すると、お腹の奥がキュンとして痺れるような快感が昇ってきた。

この前と同じ、イク前兆だ。下半身が変になってしまいそうな感覚に、指を止めた。

気持ちのいいことだと分かっているけど、いざその先へと進もうとするとどうしても怖くなってしまふ。

それに、イキたいと思うのはエッチなことだ。私はエッチな子じゃない。

だから、イケなくなったらって平気なのだ。

最近の私にとって、お風呂は数少ない休息の場となっている。

オナニーというものを知って以来、ふとした瞬間お腹の奥が疼く。その度に、つい乳首やクリを触ってしまう。最後までいくことは何とか我慢しているが、ムラムラと湧き上がってくる欲望にはどうにも抵抗できない。そんな私には、頭の中を空っぽにしてリラックスできるお風呂が何よりも癒しなのだ。

ぞくっ

しかし、そんな心安らぐ時も長くは続かなかった。

「……あっ!」

今、「瞬気持いいのが走ったような……?」

そうだ、シャワーを下に向けたときだ。水流がクリにちょうどいい感じに当たったんだ。

これはまずい。そう思ったけど、興奮状態になった体は止められない。エッチなことを考えないで済む数少ない場所だったのに、これではもう無理だ。

私は、シャワーヘッドを恐る恐る股間の近くへ持っていった。

ザ



「あっ……んっ……あふっ！」

お風呂場に水音と私の喘ぎ声が響く。いつもより声が出ている気がするのは、果たして場所のせいなのだろうか。パンツの上から擦るより強い圧力が直接クリを叩く。その刺激にたまらずクリが固くなってくる。

そのせいで水流の刺激が更に伝わってきてしまう。

気持ちいい。今はそれしか考えられない。



クリが痛いくらい勃起して、その存在を主張してくる。もっと気持ちよくしつと叫んでいる。

下の穴から愛液がドクドクと出てきているのが分かる。お風呂場で良かったと、思ってしまった。

これからはお風呂に入る度にエッチな気持ちと戦わなくてはならないだろう。

「ふっっ、あっ……うっっ！」

シャワーの向きを変え、様々な角度で刺激を与える。単調な刺激だけでは足りないと、腕を無意識に動かしてひたすら快楽を貪る。

何の手加減もなくそんなことをやっていたら、当然やってくる瞬間。お腹の中で渦巻いていた快感が一気に解放される感覚。考えるよりも速くシャワーを離す。

いつてない、セーフ。



ずっとイカないようにオナニーをしていたおかげか、イキそうになると腕を止める癖がついたようだ。おかげで快楽のみに集中できるようになった。

普段なら「こ」で終わらせている。しかし、いつもより強い快感を味わったことと後処理の楽なお風呂場であることが合わさって、更なる欲望が出てきてしまった。

もっと、したい。

右手でシャワーをクリに当てる。左手で乳首を弄る。イキそうになる。腕を離す。
これを繰り返す。時間など忘れて、快楽に溺れた。

「はぁ……はぁ……んっ」

どのくらい時間が経ったのか。気づかないうちに座り込んでしまっていた。体力を使いすぎたのか、ふとした瞬間我に返った。
あまり長い間入っていたら怪しまれちゃう。今更そんなことに気づくなんて、いくらなんでも夢中になりすぎた。



慌てて体を洗い直してお風呂場を出た。ムラムラしてクリや乳首を弄ることは何回もあったけど、ここまで歯止めが
効かなくなるのは初めてだ。次からは体が疼いてきても触らずにいた方がいいかもしれない。大丈夫、我慢できるはず。

私はエッチな子じゃないから。

オナニーの回数が日に日に多くなっていく中、私は性欲をどうにか抑える方法を模索していた。
このムラムラは、お腹の奥からキュンと滲み出してきている。

今までは怖くて触るだけだったけど、膣の方を刺激すれば解消できるかもしれない。

家に帰ってきて、すぐに部屋へ戻った。今までとは違う快感を得られると思うとお腹が熱くなってくる。

姿見の前に座ると、脚を開いた自分が見えた。誰も見ていないはずなのに、恥ずかしくて顔が真っ赤になった。

けど、性欲を抑えるためには必要なことだ。

私がやりたくてやっているわけじゃないんだ。



下着を取って、ゆっくりと下半身へ手を伸ばす。膣口は既に濡れていて、いつでも指を迎えられるようになっていた。中指の先を入り口へ少し入れてみる。とりあえず、まだ痛くない。

そのまま指を押し進めて、指先を曲げられるようになった。

不思議な感覚だ。自分の中に異物が入っているのに、不快感が無い。膣内は温かくて、中指を時折きゅうっと締めつけた。男性がちんちんを入れると、こんな感覚なんだろうか。

けれど、想像していたような気持ちよさはない。試しに指を動かしたり、曲げてみたりしたが、快感らしい快感は得られなかった。やっぱり、初めてだと気持ちよくなるのは難しいんだろうか。少し奥の方へ指を進めて、感じられる部分がないか探していく。

「……っ!?!」

突然、内腿がピクツと痙攣した。

やっと見つけた。確か、Gスポットと呼ばれる部位だ。



ようやく見つけた気持ちいい場所を忘れないよう、指の深さは変えずに同じ位置を圧迫する。

「はああ……ふう……うあ……」

ざらざらした部分を指先で押す度に、弱くも温かくなるような快感を感じる。

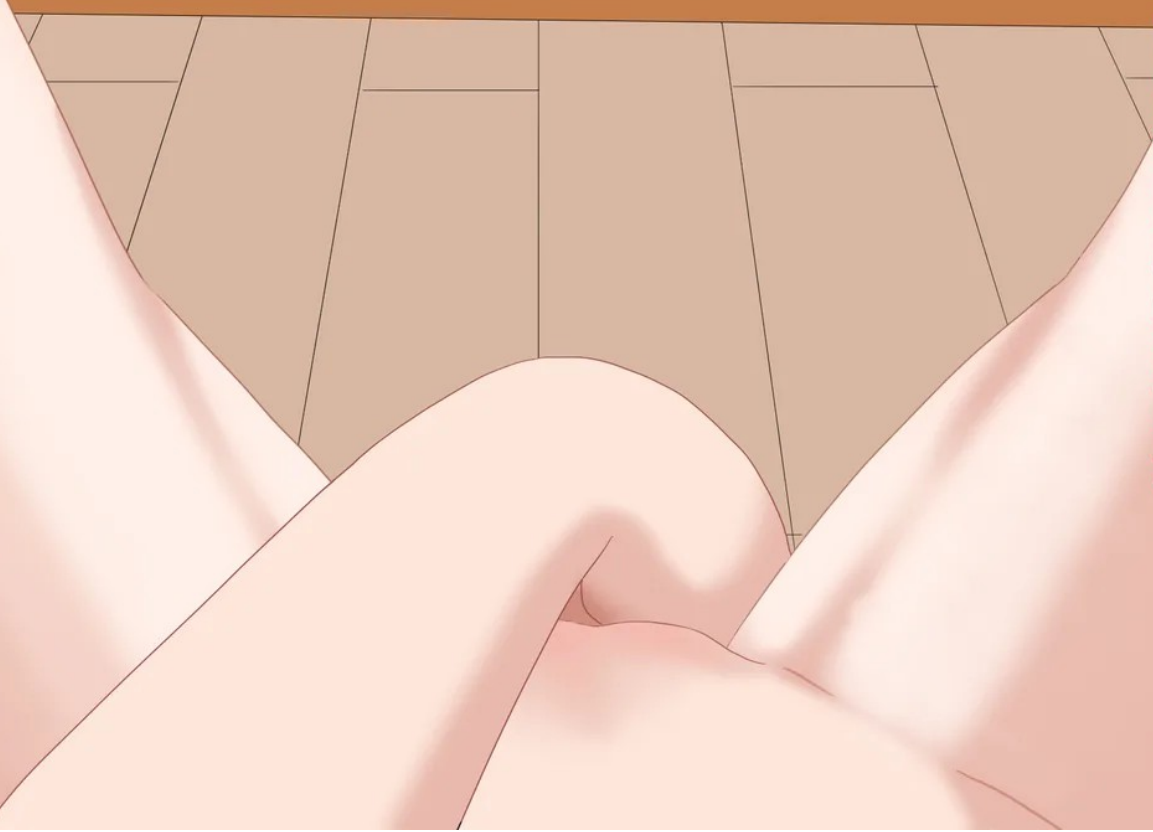
クリを刺激しているときとは違う、じわじわとくる気持ちよさだ。これならイってしまってもなげそうだった。

ぬるま湯に浸っているような、抜け出せない心地よさ。

鏡を見ると、だらしなく涎を垂らして快楽に耽る女の姿があった。

ああ……気持ちよさそう……。

夢見心地で、他人事みたいにそう思った。



誰もいないタイミングを見計らって、私は教室に戻ってきた。シンと静まり返った空間を、窓から射す夕陽が紅く染め上げている。いつも居るの場所の、いつもとは違う光景。

自分の座席へそっと近づき、机の角をそっと撫でる。

初めて性感を覚えたきっかけ。あのときの感覚を味わうために、私は戻ってきたんだ。ようやく試すことができると思っただけで、下着が湿ってくる感覚があった。

誰もいないことを改めて確認してから、私は机の角に股間を押し当てた。そのままゆっくり体重を乗せていく。

「ん、ふっ……」

ジワリと広がる快感に、思わず腰が反れる。そう、これだ。



「はぁ……んん……ふっ!」

角度を変え、腰を振り、机を動かす。最適な位置を探しながら、一心不乱に快楽を享受する。指で搔いたり、シャワーの弾けるような快感とは違った、圧力による快感。体重を乗せているせいか、いつもの数倍は強い。これではすぐイキそうになってしまい、長時間快楽を得るのは難しい。

私は腰を動かしたくなるのを堪え、体重だけをかけるようにした。甘い快感が走るも、イキそうになる程ではない。これなら、温い気持ちよさをいつまでも感じ続けることができる。

強すぎず、弱すぎない快楽に焦ったさを感じつつも、私はいつまでも浸っていたいと思った。



私が角でオナニーを始めてから、どれだけ経っただろうか。

もどかしい快楽を味わっていると、外からザワザワと騒ぐ声が聞こえてきた。

ハッと我に返ると、時計はもうすぐ19時を回るところだった。あれから1時間以上経っていたらしい。

私は慌ててその場を離れようとして——何故か、腰を動かしていた。

まずい。「このまま続けていれば、部活から戻ってきた人と鉢合わせになるかもしれない。

んん♡

く♡

グチャ♡

グチャ♡

頭ではそうと分かっていても、体は快感を求めて股間を擦り付ける。

「はあっ、はあっ、はあっ！」

今までの弱い快感ではなく、本気で感じるための動き。愛液を吸収できなくなった下着が、動きに合わせてグチユグチユと音を出す。話し声は段々と大きくなってくる。人に見られるかもしれないというのに、私はこれまでにない程に興奮していた。

このままでは見られる、気持ちいい、本当に見つかる、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい！
グルグルとループする思考が快感に染まり、単純化していく。

声がすぐ近くから聞こえた。子宮がキュウツと大きく疼き、そのまま絶頂を——する寸前で体が机から離れた。
イク直前で手を止める、いつもの癖だった。

「はっ……はっ……はっ……はっ……」

思わず床にへたり込んだ。思考が急速に冷えていく。

私……なんであんなに……。

気づけば外の声は遠ざかっていた。どうやら別のクラスだったらしい。

はっ

はっ

はっ

自分が冒したリスクに思わず身震いした。何かの気紛れでこの教室に入ってきたら確実にバレていた。

見られることよりも気持ちよくなるのを優先したんだ。そして、他人に見られると思った瞬間に感じた異様な興奮。
人に見られて気持ちよくなるなんて、露出狂の変態だけだ。私は変態なんだろうか。

違う。だって、あんなに気持ちよくなってもまだ一度だってイッてないんだから。

私は変態なんかじゃない。

休み時間。ボールペン片手に、私はトイレの中に居た。この前学校の机でオナニーをしてしまった影響が、角を見る度に体が疼いてきてしまう。そして、そんな状態で授業を受けている内にふと思った。これを膣内に入れたら、指より奥まで届くんじゃないか。



一度気づくと、疼きはどんどん増すばかり。このままでは授業どころではないので、仕方なく試すことにしたのだ。それに、奥までしっかり刺激すれば、強くなっていく性欲も少しは抑えられるかもしれない。淡い期待を胸に、ペンを少しずつ挿入していく。弄らなくとも、股間は既に濡れていた。

「ん、んっ……」

痛みは感じない。指とは違う固い感触がある。そのまま指では届かない場所まで押し進める。

「んむっっ！」

ペン先が最奥へと触れた途端、子宮から快楽が広がった。手の届かなかった痒いところまで届いたような感覚。膣がキュッと締め、快感を得るためにペンを飲み込もうと蠕動する
「むっっーふっっっーっおっ！」

ペン先が奥を突く度に声が漏れる。すぐに絶頂寸前まで上り詰め、手を止める。

動きが止まっても、じんわりとした快感は続いている。突くのはダメだ。もう少し弱い刺激にしないと。

ペンをゆっくり奥まで戻し、そのままゆっくりと回す。子宮口をなぞるように動かすと、優しい快楽が

伝わってきた。愛液が掻き混ぜられ、音が響く。他の人に気づかれるかもしれないのに、興奮はより高まっていく。



「はああ……あふっ……うぐう！」

絶頂する程ではない快楽で、それでも少しずつ絶頂へと近づきながら、夢中でペンを動かす。

ジワジワと高めていったせいか、いつもなら癖で止まるはずのラインを超えても手は動き続ける。

「ふああっ！？んむっ！ああおっ！」

今まで感じたことがない快楽に、足がガクガクと震え出す。

これ、イキそうになってる。そう気づいても、手は止まる気配を見せなかった。

子宮が痛いほど疼いている。膣がペンを動かせない程咥え込み、ギュッと締まる。体がビクビク痙攣する。

イク直前の体の反応。ああ、私本当にイッちゃうんだ。快感で飛びそうな意識の中、何故かすんなりと受け入れる自分がいた。



そのまま快楽に身を任せようとして——チャイムの音が響き渡った。
意識が覚醒すると同時に、あれだけ感じていた快感が一瞬で引っ込んだ。
私、今いいこととしてた………？

頭を振って、その考えを追い出す。違う。今はウトウトして、少し夢を見ていただけだ。それより、早く教室に戻らないと。
ペンを膣から引き抜く。

「あううーっ」

良い所に擦れて声が漏れてしまったのを咳で誤魔化して、急いでトイレを出た。ペン先からは、空気と混じって白濁した
本気汁がツーツと垂れていた。



ペンを使って以来、私は物を使ったオナニーに嵌っていった。そして、専用の道具があることも知った。今日は、それが届く日だった。到着していたダンボールをいそいそと部屋へ持ち込み、準備を始める。期待と興奮で、既に下腹部からは湿り気を感じていた。

クッションとタオルを用意し、服を脱ぐ。箱を開封すると、ピンク色のローターが入っていた。

思っていたよりも小さい。謳い文句には、イキまくりだのヤミツキだのと書いてあったが、これがそんなに気持ちよくしてくれるんだろうか。

まずはクリに当て、振動の強さを弱にしてみる。

「あっ……へっ……」

弱い振動に、もどかしくも甘い快感が走る。

「いっへっ……いっへっ……ずっ……と……」



リモコンを中にしてみる。

「あふっーはあああっー!」

思ったより強さが上がり、思わず声が出た。中でこれだと、強にしたらすぐにイッてしまいそうだ。

一度オフにして、次は膣内へゆっくり挿入していく。ペンよりも少し太い程度だからか、苦勞せず膣内へ入れることができた。こっちもまずは弱から。

「あ……はああ……」

やはり弱だとイキそうになる程の刺激はない。中に入れて、膣奥の方へローターを押し込んだ。あまり奥へやりすぎると取れなくなるから気をつけないと。

「ふっう……へっ……うああ……」

より気持ちよくなれる場所を探して、膣内でローターを動かす。卑猥な水音が部屋に響く。

「はああ……あああっー!」

大きくなった快感に腰が震えた。ちょうどGスポットのところに嵌ったようだ。



「うぐあっ！はああ！いいっ！」

膣内で最も敏感な場所に容赦なく振動が伝わり、本気汁が噴き出す。「イキそうにならないように」という考えは、既に頭から消え去っていた。燃えたぎるような疼きが、このときだけは癒されていた。

「いあっ！あうっ！もうダッああっ あっ！」

もうダメ、本当にイクッ………！

そのとき、お腹の筋肉に力が入り、膣壁が勝手に締まった。その膣圧で、大量の愛液とともにローターが穴から出てきた。イク直前で刺激を失い、入れる物を探すかのように穴がパクパクと蠢ぎ、その都度白く濁った愛液がドクツドクツと溢れ出てきていた。

あ♡

あ♡

♡ロター♡

イカないようにすることを、完全に忘れていた。ローターが勝手に出てこなければ、イッてしまっていただろう。

溜め込みすぎた欲求不満に負けつつある。

今まで自分を普通の女の子だと思っていた。それは、どれだけオナニーをしても「イク」となるまではやってない」という自負があったからだ。でも、それが今崩れつつある。

「私……どうしたらいいの………」

イキそうねて未だにジクジクと疼くお腹を抑えて、私は呟いた。

寒さが増し、本格的に冬が到来してきた。

もはや疼きは常態化し、体の感度も上がったまま戻らなくなってしまった。

今の私は、肩を叩かれた程度でも感じてしまうと思う。

このままだと、たとえ自分では我慢できても何かの拍子に
イッてしまってもおかしくない。

だから仕方ない。これは必要な処置なんだ。

ローターの弱い振動を感じながら、自分にそう言い聞かせる。

大丈夫。上着のおかげでスカートは捲れづらくなっているし、万が一捲れてもタイツ越しなら見られる可能性は低い。

おまけに、タイツがあれば愛液が垂れてしまう心配もない。

本当は膣内に入れたかったけど、取れなくなったら困る。



とにかく、「これならいつでも疼きを癒してもらえる。」

強さは弱に抑えているとはいえ、既に固くなっているクリに当てているせいか時折腰がビクビク震えてしまう。

思わず周りを見渡すが、特に見られている様子はない。あまりキョロキョロしすぎるのも不自然だ。なるべく、何でもないような澄ました顔でいないと。

普段通りの顔と歩き方を意識しつつ、私は駅へ向かった。



「はぁ……はぁ……んっ……」

下腹部の疼きを我慢しながら、ノートを取る。教室には先生が授業を進める声だけが響いていた。

「……んっ……ふううッ」

少し身動きをするだけで、ローターがグリグリと押し付けられる。不意に来る刺激に声を上げないよう、何とか堪える。

これ、すっ……いもどかしい……

ムラムラを抑えるために着けてきたのに、これじゃ余計に……

振動をオンにできれば少しはマシだったかもしれない。けれど、そんなことをしたら音が響いてしまう。

「うんっ……ふっ……んっ……」



何とか刺激を送ろうと腰を動かすが、満足できる程気持ちよくなれず、もどかしさは募るばかり。

こんなことなら膣内に入れておけばよかったと後悔したが、仕方ない。今は授業に集中しよう。

元々はそのために、恥ずかしさを我慢して着けてきたんだから。

意識を切り替えようと頭を振って、先生の声と黒板に集中する。疼きなんか気にしない。

もぞもぞ

——ズクン

集中、集中。

——ズクン

——ズクン

——ズクン

我慢、我慢……。

「……………う、ぐぐぐ」

だめ、我慢、できないっ……………！

体が刺激を求めて勝手に動く。弱々しい性感が送り込まれ、嫌でも性欲が喚起されてしまう。



もう、無理だ。こっちを見ている人がいないか確認し、左手をこっそりスカートの下へ忍ばせる。

タイツ越しに下着に触れると、ぽっころと一部分が盛り上がっている。今朝付けてきたローターだ。

それを少しずつつ、下へずらしていく。

「ぐぐぐ……………んっ！」



当然、動かす度にローターがクリに当たり、先程までより快感が強くなる。それでも何とか、膣口の方へ動かすことができた。

「っふーんっ!」

押し込むと、あっさりと膣内に入った。そのくらい濡れて、トロトロになっていた。

けど、「こんなに手前だと振動をオンにしたとき、音が漏れてしまうかもしれない。もっと奥まで動かさないと。

.....それに、奥の方が気持ちいいし。

「く.....おっ.....ぐっ.....」

流石に下着の中まで手を入れるとバレるかもしれないので、膣を上手く締めて奥の方へ少しずつ移動させていく。

「ふうーっ.....ふうーっ.....ツッ!」

「っっっっ.....っ.....ちょっと気持ちいいとっっ!」

後はスイッチを入れれば.....。



「.....ツッひあああああああツッ?..」

ツッなんで、「これ、強すぎ.....っ!」

慌ててスイッチに触れると、弱ではなく強になっていた。すぐにオフにするも、急に大声を上げた私に、

何事かと視線が集中していた。



今の私は、どんな顔をしているのだろう。太勢の前ではしたない声を上げ、なのに下腹部が燃えるように熱い。こんな状況になっても、体は絶頂を求めて膣肉をキュツと締めつける。

込み上げる快楽を何とか抑えて、それだけ呟く。

一応納得してもらえたのか、何事もなかったかのように授業は再開していった。もし、気づかれてたら。一体私はどうなってただろう。

ビクッ

色んな人に変態扱いされるのかな。男子に呼び出されて、エッチなことされちゃったりして。それで、イキたくないのに無理矢理イカされたり……。……。

「っっっ」

ちよつとそんなことを考えれば、膣がローターを締め上げて、快感が流れる。

結局この日は、似たような妄想が頭を離れず一日中悶々と過ごす羽目になった。

か
た

今日は朝からツイてない。

初めて玩具を着けて学校へ行った時と違い、今日はちゃんと膣内へ挿れてきた。しかも、新しく買った膣内専用のバイブだ。膣の形状に合わせてイボイボが付いていて、振動機能を使わなくても気持ちよくなれる。

それだけではなく、乳首にはローターを貼ってあり、いつでも好きな場所を刺激できるようにしてきた。

これで、襲い来る性欲の波にも対応できる。そう思って少しウキウキしていたのに、電車が遅延していて、潰されそうな程満員な車両に乗らなければいけなかった。

おかげで、乳首とクリが、擦れるっ……!!

密接している人が動く度に、ローターが乳首を、バイブがクリを刺激してくる。

子宮がキュンと疼き始め、ムラムラと性欲が鎌首をもたげる。

ローターでもバイブでもいいから、スイッチを入れたい。

けど、こんな状態じゃポケットに手を入れるのも一苦勞だし、周りの人に振動が伝わってしまうかもしれない。



「はあっ……はあっ……はあっ……」

こんなの、生殺しの拷問だ。

身動きが取れないまま、満足できない中途半端な刺激を送られ続ける。体が燃えるように熱い。

しかしその熱は放出されず、体の中に溜まり続ける。

モゾモゾと体を動かして刺激を得ようとしてと、欲している程の快感は与えられず、更に性欲が掻き立てられるだけだった。大勢の人間が密集していることに加え、昂り続ける性欲のせいで頭がクラクラしてくる。



なのに、体は少しでも強い刺激を求めて虚しく動き続ける。隣の人が迷惑そうにこちらを見てきた。それでも、止められない。だって、しょうがないじゃない。

こんな風に焦らされたら、女の子なら誰でもこうなるに決まってる。

ただでさえ、私はイカずにずっと我慢してきてるんだ。

茹で上がった頭によぎるのは、母の怒鳴り声。そう、イクのは悪いことで、エッチなことだ。

だけど私はイツてない。だから乳首を摘もうと、膣に何かを挿れようと、エッチな子にはならない。その、はずだ。

体を振って虚しい自慰行為をしながら、そんなことをぼんやりと考えていた。

ガタン、と電車が大きく揺れ、ハッと遠くなっていた意識が戻った。慌てて吊り革を握り直すと、慣性に押された周囲の人が大きく寄りかかってきた。

——カチッ。

カチッ

い

レ

ク

り

……？今のって、何の……

音だろうと考える暇もなかった。

「ツツツツひあああああ？！」

膣内から猛烈な振動が生まれ、飢えた体にとてつもない快感が叩き込まれる。

「んはあああ？！なんでっ？！何っこれええ？！」

あああッ？！

もしかして、バイブのスイッチ、入った……？！しかもこれ、いつものローターより全然強いっ……！！

少しでも快楽を逃がそうと身を振らせるが、こんな満員電車ではそれも叶わない。

だめ……これ、完全に女の子をイカせるための動きしてるっ……!!

いつもならイカないよう慎重に、片方ずつ弄っているクリと膣内を、凶悪なバイブがまとめて刺激してくる。

本当は、振動機能は使うつもりがなかった。

ただ、挿れているだけでイボイボが程よい快感を与えてくれるから、そのつもりでいたのに。

なのに、こんなところで、こんなときに……!!

とにかくスイッチを切って……

う……う……

「……あ、れ？」

今の私は、両手で吊り革を持っている。周りには人が隙間なく密着していて、下腹部どこかポケットに腕を伸ばすことすらできない。

これ、どうやってスイッチ切るの……?

「……っふううう……っふううう……!!」

う……う……

焦っている間にも、バイブは容赦なく私のアソコを攻め立ててくる。

フルフル……

これ、本当にやばいっ……身動き取れないのに、気持ちいいのが体の中暴れてる……！

太ももでスイッチに触れられないかと脚に力を入れてみるも、膣内が連動して締めまり、走る快感に腰が震えた。一体どうしたらいいのかと思わず周りを見ると、皆の視線がこちらを向いていた。

同じだ。初めて玩具を付けたまま学校へ行ったときと。違うのは、見られているのにスイッチを切れないことだけ。

「ふああ……ちが、違うんですうッ！その、足をふま、踏まりえてえ……！あふっ！」
気持ちよすぎて、呂律が回らない。だめ、誤魔化せない。

違うんですうッ！

ういあ……！

これはあ

けど、もうそんなことどうでもいい。

長い間欲求不満だったところに、こんな強い快楽を動けないまま与えられて。

こんなの酷すぎる。私はイカないようにずっとずっと耐えないとダメなのに。

イケないのにこんな気持ちよくされても、ただ辛いだけだ。

ビクッ ビクッ

ググググ

ガクガク

パイプから枝分かれした柔らかい壁が振動と共にクリを撫でる。腰が抜けそうな程の快楽。歯を食いしばり、全身に力を入れて耐える。

イボの一つ一つが膣内の弱い部分をほじくる。振動を抑えるよう、限界まで膣をギュツと締めて耐える。絶え間なく湧き出てくる本気汁が太ももを伝う感覚。

子宮口を先端がグリグリと抉る。

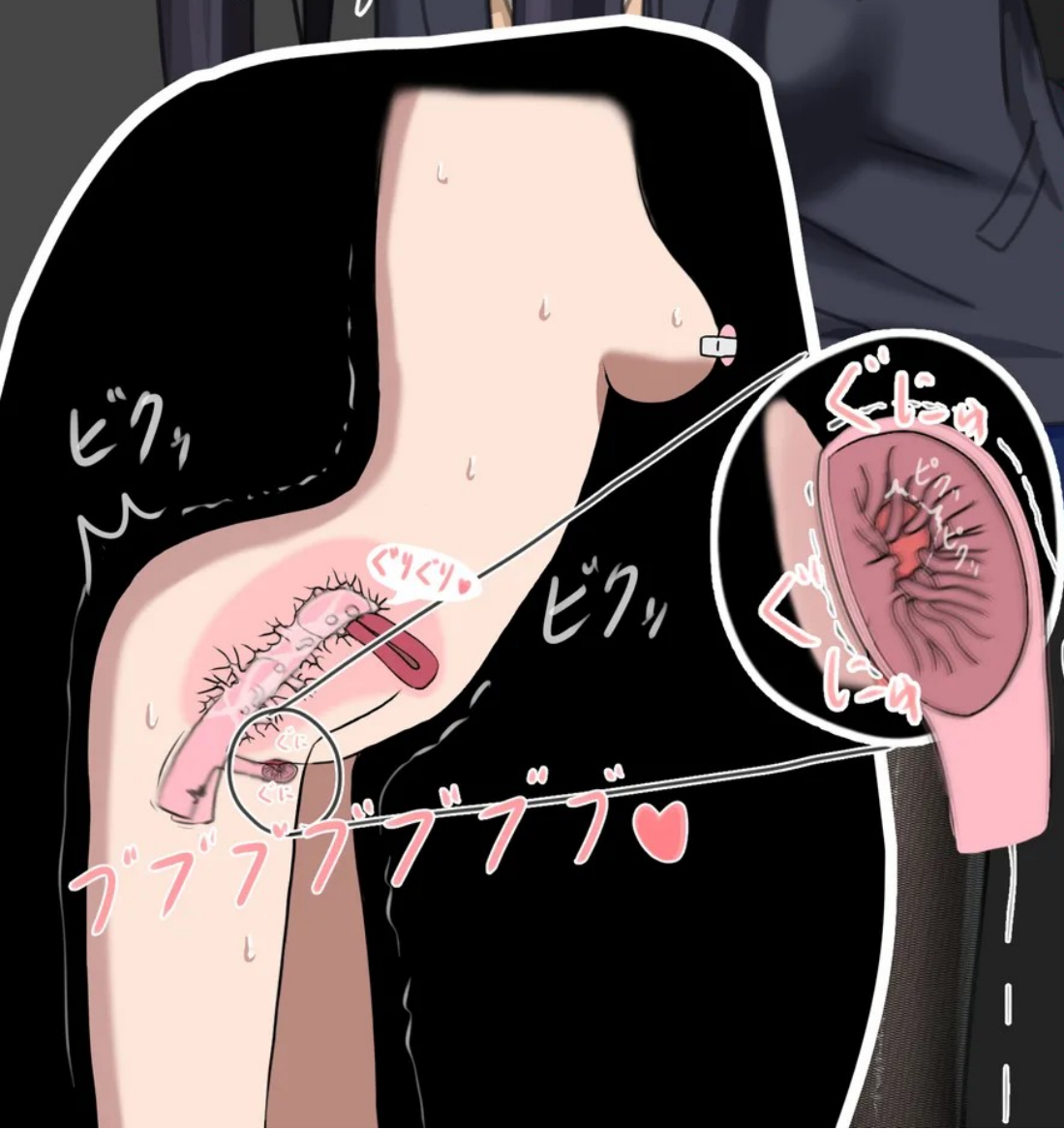
頭を振り乱し、爪先をピンと伸ばして耐える。全身が勝手にビクビク痙攣し、それでもイカないように必死で耐える。これ、いつまで、続くの……?! ちょっとでも気を抜いたらイツちゃう、のにつ!

どんなに頑張ってもイク直前から抜けられない……!!

こんな寸止め状態で耐え続けるなんて、地獄だ。

「うう、う……もうイヤああ……早く……」

早く着いて……! じゃないともう、私……!!



絶るように周りを見渡すと、未だに好奇の視線が向けられていることに気づいた。

中には私がトイレでも我慢していると思ってるのか、ニヤニヤといやらしい目で見ている人もいる。

私が、今どんなに苦しい思いをしているかも知らないくせに、

クリを根元から余す所なく舐められてることもっ……！ 膣内の弱いところ、全部擦られてることも！

子宮の入り口、グリグリ挟られてることも、知らないくせにっ……！！

呑気に眺めているスカートの途中でこんな酷い責め苦を受けているなんて、夢にも思っでないんだろな。

けど、それもあと少しの辛抱だ。あと少し耐えればこの生き地獄は終わる。駅に着きさえすれば……！！

「……うぎっ？！」

突然強い慣性がかかった。急ブレーキがかかったらしい。

Gスポットにバイブが一気に食い込み、堪らない快感が脳を焼いた。

「い、ぎぎぎぎっ……！！」

ただでさえイキそうだったところに追い打ちをかけられて、それでも歯を食いしばって必死に耐える。

あと少し、本当にあと少しなのに……！！ 耐えろ、耐えろ私っ……！！

うーっ、♡

うーっ、♡

はーっ、♡

あ、♡

うーあ♡

うーっ♡

はーっ♡

うーっ
ギッ
ッ！！

ピク

ピク

ピク

ピク

ピク

ぐ♡

そのとき、誰かがバランスを崩した。周囲の人も巻き込まれ、とっさに近くの物を掴んで踏ん張る。

そして、その掴んだ物の中には、私の制服も含まれていた。ちょうど、ローターのスイッチを入れていたポケットの辺り。

「……え？」

一瞬、何が起こったのか分からなかった。そして、数秒遅れて両胸に突然現れた暴力的な刺激と快感に気づく。

「ツツツツツッうあああ、あ、あ、あー？」

ただでさえバイブによってイク直前まで追い込まれていたのに、乳首への不意の快感。

耐え続けていた壁は崩壊し、絶頂へ向かって突き上げられていく。

——
え？

カチッ

もうダメ、もうダメ、もうムリ！

下の弱い所を全部攻められ続けて、それでも耐えてたのに！

上まで攻められたら、こんなの！

耐えられる訳、ない……！

[illegible]

声が出なかった。
息が止まり、視界が明滅し、体が大きく仰け反る。
頭が真っ白に染まり、意識が霧散する。
ずっと子宮で渦巻いていた何かが、消えた気がした。
「……………イツちゃっ、た、んだ……………」



気づけば床に倒れていた。
股間から何かが噴き出している感覚があるけど、
そんなことは気にもならなかった。
意識は朦朧としているはずなのに、
長い夢から覚めたような感じだった。
周囲からはザワザワと騒ぐ声が聞こえる。
もう取り返しがつかないはずなのに、
何故か口角が釣りあがっていた。

その後、私は駅の医務室に運ばれた。

どうやら、トイレに間に合わずに漏らしてしまった可哀想な子だということになっていたようだ。

近くにいた人からは私のおまんこに突き刺さったバイブが見えていたかもしれないけど、まあ、別にどうでもいいか……

最近、新しい遊び方を見つけた。

まずは、両乳首をそれぞれ2つのローターで挟んで絆創膏で留める。

次に、私を初めてイカせてくれたこのパイプだ。

これを、膣内に奥までしっかりと挿れてっと……。

「ん、ふう」

これは下着を着ければ固定できる。

後はニーソックスを履いて、大きめのコートを羽織れば準備完了だ。身に着けた全ての玩具のスイッチを入れ、外へ出る。

今日は、イカないように焦らし始めてからちょうど1週間になる日だ。



「はあーっ、涼しい……」

コートの際間から入ってくる夜風を肌で感じながら、外を歩く。

ローターとバイブの刺激で脚がガクツと崩れ落ちそうになるのを無視して、そのまま無理矢理歩き続ける。



がク

がク

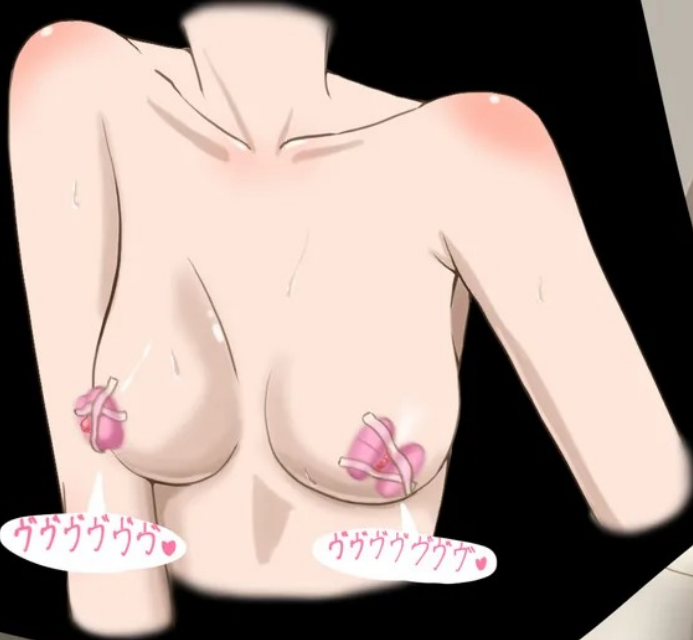
こうすると、膣奥にグリグリ当たって気持ちいい。

1週間、様々な方法で刺激を与えられつつも絶頂を迎えられていない体は簡単にイキそうになるが、それを何度も堪えて、一步一步坂を登っていく。

このくらいの快楽であれば簡単に抑え込める。

何せ、一年以上イカずに悶々と過ごしていたことだってあるのだ。

あのときの狂おしい程のもどかしさに比べればなんてことはない。



じっくり焦らされて熟れ切った体に、特大の快感を叩き込まれて
絶頂するあの解放感は今でも忘れられないが、
それでももう一度やってみたいとは到底思えない。
また1年間以上もイケないまま生殺しの地獄を味わうなんて、
絶対に嫌だ。



昔のことを思い返しながら歩いていると、気づけば目的地に辿り着いていた。
丘の上にある公園。近所では有名な夜景スポットだ。

とはいえ、こんな深夜では人もいない。

「っっはあああ、気持ちいい……」



ベンチに腰を下ろし、コートも下着もニーソックスも、
そしてパイプとローターも、何もかも取り払う。

今ここにあるのは、美しい夜景と、1週間お預けにされて絶頂を求めるこの体だけ。
「っっっっっ」

あのときはまた違う、凄まじい解放感に、私は絶頂した。

でも、まだ足りない。

「……1週間ぶりだし、ね？」
外したパイプやローターを再び身に付ける。
もう、我慢はしなくていい。

私はエッチな子になってしまった。
いや、元からそうだったんだ。

あ、

ふいあ

ビクッ

ビクッ

ガクガクガクガク

ビクッ

えっ

トロー

くは

うあ

ビクッ

おっ

ただ、違うと自分に無理矢理言い聞かせて、押さえ込んでいただけ。
けれど、それももうやめた。
だって、こんなに気持ちいいんだもの。
私はエッチで、性欲が強くて、変態の女だ。

「あつ、ふあつーんふつ、くはああー気持ちいいっ！そこっ！
うああ、あ、あつー、おっ！」



END

